



古今  
 一閑人  
 四



遠  
 1643  
 4止



13  
1648  
4



今古一閑人卷之四

多門好海は僧老す



京師の志麻氏力ある僧醫ありて中微職より屋  
起し博學多材詩人たるは又辯多徳あり醫術も  
古法を承りしき傳を海を渡りて小兒科  
を治めり名一時は著す他邦に其名を傳へり  
城控に正史の卯列に一子家景を教同の場  
にふりて教十箇の邊境醫士胡より書きて海

夕小文を属す卯時より亥時の病人薬を以て  
限はがぬる破壊するばう辰時より巳時迄して  
言下に術を施し申時より酉時迄して止む志願氏  
は皆温柔寛容雅情ある人ありて得れざるは  
の朋友と称し又はお折よく筆を翰を以て  
置酒款待志を去り又男子わくわく一人なり  
何れ名を何れとて之を解するありは花屋  
を以てあざむき柳腰燕の舞を以て因を編む  
ては能く遊つては因けを傾ぬの軽い死に  
て西

設も好むをせんとす又の世情を以て  
あて和ぬのそは紙漉出り文字も抑へて  
をぬんぞ教書の檢校替なり紀曲教書をして  
たぐまれ雨おがの。六時寒く始乃月々々の食  
遠小書を願先奥を流す花頂の竹に和ぬ  
小堂堂いつびを一向にわすれかるともに極  
を以てて極を信すの卯依水の極ふ  
おまかどきく極むに況んや劇場の地を  
踏むをいししと極むとて極めり又お

此の如くはくかゆやうの如くすはるまじし  
かりて是も庖厨へたよおされば学寮中の有  
いへも寂しいはずあつた家事よきことと事し  
備な州乃者よと谷多内とせられて又人云を  
濡るがごとく馬を乗る様體より一母を顔としも  
智を好く瘡瘻の二瘡を習々と満ち書と書と  
とも別のおもさされバ顔は濡るごとくあつて  
いふれどかゝる頑愚乃は質を習とせよ人云  
はうろ又舟の揺さくして人戯笑もあつた時用印

あつたハ其家より一例を守ゆり尾せりと今  
も遊々紋濡の如いなり其もかけす因案  
乃書せす貌を好くかゝるこの匿名を厭巻と  
かゝるあつたは子汗濡と定められといへども  
河東より女を贖ひ澤川やきくかゞびして若白  
乞がし是も子濡とせし書籍衣履亦もろし  
おひあまの木の多内林いざるよ一軒と若瀬柳  
志おあまのこをこえよあつてバ智も少くあつた  
あんなど嘲弄されよ柳争端もせずあつた困







増す一毎い阿彌よむいかく持あまをよむ  
しき根氣一て沖たらしち糸の景園に  
名もや汚するもあふんよせめて流せうそ縁  
これがわあそぞ流るる流るるわあそぞ  
おれに南就せばあふんよむまも自ら  
顧りみて細もわあそぞいよ流るるわあ  
とけを阿彌とそそいよ流るるわあ  
と流るるわあそそいよ流るるわあ  
私をわあそそいよ流るるわあ

れど家も事よにそそいよ流るるわあ  
れりもわあそそいよ流るるわあ  
とあ自勉勵して業をそそいよ流るるわあ  
十とかせえん目よ一流るるわあ  
吻の字痕そそいよ流るるわあ  
うらやがく仇係のわあ  
あむ思わのわあ  
并のわあ  
私を知るの一端





かろむ好婦と廣天地のちかぢうのちかぢうのちかぢう  
かぢうれつべーかぢうれつべー一人よれをを集をれ  
あやめる大女まのまふとまふとあ〜びと再び必  
ちかぢうみゆゆ多内らちかぢうと心外若〜く只  
海よむせび〜がき〜か〜とあげかく心とこぼし  
ふ〜ゆ〜のた〜ちかぢう〜とあぢのま〜とあぢ〜  
さよゆら令愛まふちかぢうのちかぢう〜とあぢ〜  
人のちかぢう〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
白刃を踏んぐ黄泉の縁よちかぢう〜とあぢ〜とあぢ〜

やうの同王の樹子繁人〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
を踏〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
幽子一隅のよを志願申主人を擁〜とあぢ〜とあぢ〜  
阿蘇か〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
多耳子雲より大吠門外よあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
か〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
あ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
た〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜  
ふ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜とあぢ〜







七福七難圖會

浪花瑞馬著  
明石東虎画

近刻

七部集續七部集

七部集續七部集  
七部集續七部集  
七部集續七部集

全八冊

七部集續七部集

七部集續七部集  
七部集續七部集  
七部集續七部集

文化元年甲子孟春

大坂

和泉屋吉兵衛

京都

書林

菊屋太兵衛

梅村伊兵衛

著屋儀兵衛

